

昭和二十四年七月二十三日
第三種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第三一四号）

慈

光

第二十七卷

第八号

次

報恩講話……………近角常音……………(1)

よろこびのあと……………菅瀬忠子……………(8)

私の記録……………(二)……………高千穂徹乗……………(12)

愚禿のころ……………松村繁雄……………(14)

念仏詩抄……………木村無相……………(16)

夏の御文……………花田正夫……………(19)

目

報 恩 講 法 話

近 角 常 音

(註)昭和二十六年十月三日、西源寺にて、大字三右衛門氏筆記。
講恩講を勤めさせて頂きまして、大変乱暴なお話を皆様
に聴いていただきましたが、私は非常に有難く、大変満足
に思っています。

朝はお名号のお話を聴いて頂いたのですが、聖人
の御晩年の正像末和讃に

無碍光仏のみことには、未来の有情利せんとして

大勢至菩薩に、智慧の念仏さすけしむ

濁世の有情あわれみて、勢至念仏すすめしむ

信心のひとを撰取して 浄土に帰入せしめけり

とありますが、聖人は、大勢至菩薩の化現の法然上人に

無碍光仏が智慧の念仏をさすけて、これを親鸞聖人に授け
られたと随喜していられるのであります。

念仏一つでたすけたいばかりに五劫永劫の御苦勞とあ
る。今朝お話した念仏は、我々をたすけたいばかりのお
慈悲の念仏であることを知って頂きたかったのであります
念仏は二通りある、称えてたすかろうとするものもあり

ますが、歎異抄一章に示された「念仏申さんと思いたつこ
ころのおこるとき、まだ声にも出ないでも、ああ有難いと
そう思うとき、撰取不捨の利益にあずかる」と申されてあ
るのであります。お念仏をいただく、いただくとは下さる
ということ、そのことわりをわからせて貰わぬといかぬの
であります。

法然上人は選択集に選択本願の念仏をお勧め下さいまし
たが、それはお慈悲の念仏ということであったのでありま
す。このところは注意が肝要なのであります。

で、しっかり聴聞させて頂くについて、歎異抄二章に

「各々十余ヶ国の境をこえて、身命をかえりみずしてたす
ねきたらしめたまうおんころろざし……」

とあります。関東から聖人のお跡を慕うて上落された是
等の人々は、聖人が関東御滞在中には親しく接して、一応
有難いとわからせて頂いて居った人々なのであります。が、
聖人の御帰洛後は、ああだ、こうだという工合に、色々言
う者ができて、それらの説に惑わされてしまつた。それら

の人々の心持の上で充分でないものがあつたものと思われ
るのであります。

聖人はどうして関東からお帰りをなされることになつたも
のか、昨夜もみんなと話していたのですが、齢六十歳にも
なられてから、どうして御帰洛なされたのか。お帰りに
なつて後も盛んな伝導でもして御座つたかというに、殆ん
ど何をして、どうしておいでになつたものやらとんとはっ
きりせない。恐らくは人にかれこれいはいはやされる事をお
厭いになつて、隠れて居られたのではあるまいかと思える
までに、御消息がはつきりしませぬ。「跡をとどむるにも
のうし云々」とあるように、彼方、此方に移り住んで居ら
れたものとみえる。

そこへ関東の同行がたずねて来たのである。「ひとえに
往生極楽の道をといきかんがためなり」ほかのことでない
往生のことである。それに聖人の御返答は「念仏よりほか
に往生の道を存知し、また法文等をも知りたるらんと、こ
ころにくく思しめしておわしましてはんべらんは大きな
あやまちなり云々」と。念仏以外に何かあるのでないか、
もっと奥深いことを御存知あるのではないか、それを承り
たいと、わざわざ遠路たずねて来た人々に聖人は、お慈悲
の念仏以外に親鸞が何かこと珍らしいことを知っていると
いうことなれば、それは大きなあやまりで、そうでない。

この親鸞は念仏以外に何も知らぬ。念仏よりほかに何ぞ奥
深いことでも知りたいと思うのであれば、奈良や叡山へお
出掛けなさい、立派な学者におたずねなさるがよい。

「親鸞におきては唯念仏して弥陀にたすけられまいらす
べしと、よき人、法然上人の仰せを蒙つて、この念仏が
有難いと思わせて頂いている他に別の子細なきなり」

このところ、よく注意して聖人のお喜びというものが
どういうものであつたか、これで頂かして貰うてみるとわ
かるのであります。即ち、お慈悲の念仏以外何も無い。唯
有難いと信じさせて貰つた以外に何も無い、給してもつて
存知せざるなりである。この念仏がどういうわけのものや
ら親鸞にはわからぬ。念仏さえ称えていると往生は間違
ないとりぎんでいのではない。たとえよき人にだまされ
て地獄へおちても後悔するところはありませぬ、と仰せら
れたのであります。更に後悔はない、その故は、この親鸞
が念仏以外に何かたすかる分別があるにかかわらず、法然
上人にだまされたと後悔もせねばならぬが、何がさて、何
とも仕様の無い親鸞であつてみれば、よしんば上人にすか
されて念仏して、それで地獄におちようと、自分が地獄に
おちることを憐れんでお助けとある。御親切のこもる念仏で
あることを頂いてみれば、何もいうことはない。

さて、よき人法然上人が何を説かれたか、前に申した上

人の選択集を、これを皆さんに聴いて頂こうと思ひます。これをお話して見たい。文章が長いけれども、これを讀ませて貰つて皆さんに聞いて頂こうと思ひます。それは、四十八願を約して、選択とはえらびにえらぶことである。さてここで、蓮如上人の

もろもろの雑行雑修自力のころをふりすてて、阿弥陀如来、われらが今度の一大事の後生おんたすけをうらえと一心にたのみ申してさうろう……。

にわかには改悔文にとびますが、改めて悔いる、それは何故か。今までは雑行雑修も結構、親孝行もよい……誤解されると困りますが、孝行するのがいかにと申すのではない。我々は本當の孝行が出来るものでない。出来ないのが可哀想と仰せ下さるのに、その仏の御心を頂かずして、念仏称えながら、孝行も結構、人にもよくせねばならぬと他の事をやっていると、これは雑行雑修であります。

どれだけきんでみても我々に出来ないから、その出来ないことを憐れむ仏の御心を頂いてみれば、即ち仏の広大な慈悲を知らされると、今まで自分は出来ぬせぬの、ああもすれば、こうもすればと、一角出来るかのように考えていたことが申訳なくなつて、そう思つて居たことが済まなくなり、いきおい我身は悪しきいたずら者なりとなつて直に雑行雑修自力のころをふりすてて、それこそひとえ

とつてこしらえて下されたのが阿弥陀仏の浄土である。

次に、往生のことについて色々あげられてあります。布施をもつて往生の行とするもの、或は持戒をもつて往生の行とし、或は忍辱、或は精進をもつて、或は禪定を、或は般若の智慧、或は菩提心をもつて往生の行とすると、このようにいろいろ説かれてあります。

昨夜の御伝抄のお話の中の法然上人以下御流罪に遇わせられたのは、この菩提心のごとて譴訴にあわれたのであります。それが今の菩提心といふことで、次に或は持経、呪文（じゅもん）を唱えて病氣平癒を祈る。或は建立塔像、これは塔を建てること。更に孝養父母、奉仕師長などと、このように二百一十億の国土がある。或は専ら其国の仏名を称して往生の行とするものもある。以上いろいろある中に、讀みつくせませぬが、かく多くの国土を選びすて、唯仏名、即ち名号を唯これ一つを選びとつて下された。

そこで、問うて曰く、粗悪を選び捨てて善妙を選び取る。第十八願は一切の諸行を選び捨てて、唯ひとえに念仏の一行を選択して往生の本願とするやと。

仏智のことは吾々には分らないので十分に話せませんが法然上人のお言葉を申してみますと、難を捨て易をとる。如何なる者も称えられる念仏である。勝をとつて劣を捨てて。名号はこれ万徳の帰するところなり、一切の功德名号

に仏ひとつとなること、一心といふこと、我々からきんで一心となるのでないのであります。

我々を捨てたまわぬ大慈大悲の御心ひとつが解つてみれば、それこそ一心に、阿弥陀如来、おたすけ下さいとたのみ申す心ばかりである。即ち一心にたのみたてまつるほかはないとあるのであります。

そこで選択集のことを申して見ます。

夫れ四十八願に約して、一応おのおの選択撰取の義を論ぜば、第一に無三惡趣の願といふは、親見（とけん）するところの二百一十億の土の中において、或は三惡道ある国土あり、そこにたとえ我仏を得たらんに、我浄土には三惡趣なからんことをおもうて下された。正信偈の法蔵菩薩因位の時、世自在王仏の所にましまして、諸仏の浄土の因と、国土や人天の善惡を親見されて、とあるが、世自在王仏の光で二百一十億の浄土、その深山の浄土を見せて頂いて、その浄土の中で、或る浄土には三惡趣があり、或は無浄土もあるのを知られて、それではいかぬと選びにえらんで三惡道をなないようにされる。

第二には再び三惡道におちぬようにして下される。更に寿命に限りがあつてはいかぬ、即ち無量寿でないといかぬ。このように粗悪の浄土を捨て極上の浄土を選択撰取して下された。このように、まことのかたまりばかりを選びにこもる。八万四千の光明の中におさまる。名号以外の行は、その一隅だけ照すものである。念仏は修し易く、諸行は修し難い。段々こういふことを説かれているのである。

耳四郎という破戒の者、到底天人共に許さぬ極悪の者、泥棒の極悪人を不憫、可愛想ですてられぬとある広大な慈悲なのであります。阿弥陀仏、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催うされて、一切を救いたいばかりに御苦勞下されたのである。

私の読みようが粗略なためにいけません、ここがお慈悲の念仏といふことをよく知つて頂かねばなりません。今申しました耳四郎のお話、破戒無戒の仕様のない者、これはひとごとでなくして、吾々の如きやくざ者、その者が憐れとお慈悲であるのであります。

何時も聞いて頂く、蛇のたとへ話ですが、生れながらにして、長い姿をして人に嫌われる。然るに、あれはあれの本来的な生れつき、治らぬ性であるとして下された故、その蛇を捨てぬとのお慈悲である。猫にしても、それに生れた以上は、人の膝に馴れ、鼠を見ればとびついて捕らねばならぬのが猫の性である。

これは譬喩なれど、吾々各人の問題であります。手が痛い、歯が悪いというように吾々一人一人の問題である。寸分どうにもなりません。貧乏で苦しむ、これ銘々の業であ

る。蛇とて人にああも嫌われたくないであろう。こんな姿でこんなことでは人に嫌われる。それ故その蛇は修養して心得顔に三尺の姿が二尺五寸位によく言ったとすまして歩いてゐる。腹立ててはならぬ、心得ていまずと本人はひとかど善くなつた積りであるが、何、そばから見てみるとすこしもよくなつて居らぬ。もとの三尺そのままであり乍らちと心得て二尺五寸になつてゐるというのが氣に喰わぬと、人皆が石を投げる。こういう蛇には容易に同情が集りませぬ。かくなれば蛇は何とも仕様のないことになつてしまわねばならぬ。それでは浮ばれぬのである。問題はこの蛇がどこでどうして救われるのか、非難し、退けられるだけでは何ともならぬのであります。

その蛇に、一緒になつてやるとの真実の友達が無くしてはこの蛇は浮ばれぬのであります。然るに蛇は元來心がねじけて居りますから折角一緒になつてやると、親切に寄りつく真の友達をも斥けてしまつておる故、親切そうな顔をして何云うのか、俺をからかひに来たのか、ほつといつてくれと蛇はいふ。心がねじけてゐる故なかなかその人の親切を受けようとせぬのである。

如来様が憐れと仰言つて下されても、いらぬお世話だ放つておいてくれと云うなれども、そう云う君が氣の毒だから、君が何と思ひ、何と云おうが、自分は君のそばを離れ

いたけばなり。

これは善導大師のお言葉であります、その通りで吾々というものは腹と口はあべこべである。中々よい事が実行出来ませぬ。求道学舎に居たある学生が入水自殺しようとしたが死にきれず、生きかえりました。その学生の話によると、人間いよいよ死ぬという最後の時になつても芝居心が出て、まことになれぬものだと申してゐた。このように人間は生命を捨てても真実になれぬ、まことになれぬ故、そこを仏が憐んで下されたのである。

真宗は肉食妻帯をしてゐる。これは聖人が仰せ出されたのであります。当時としては実に思ひ切つたことである。色々非難嘲笑の標的になられたことであろうと推察申されます。聖人は虚仮で一枚になつてしまわれた。学者、聖人、君子振ることが大嫌いであられた。

キリスト教は、隣人愛を教えられるけれども、心から隣人を愛せるかというに、それは吾々に出来ない。色々教えられ、自分でも策励努力しても、絶対に出来ぬのである。即ち口と腹とはあべこべで、吾々人間、悲しい哉、どうしてもその如く立派になれないのである。

世の中に尼の心は捨てよかし

牡牛（めうし）の角はさもあらばあれ

まとまりのつかぬ話をいたしました、罪の深い者が、

ぬと、何処までもつき纏うて下される。

皆さんここをよく氣をつけて聴いて頂きたいのです。真宗のかなめは、可哀想という、これ以外は無いのである。

お前の治そうにもどうしても治らぬが可哀想、腹立てるが可哀想との仰せ、喜ぼうにも喜べないのが不憫、可哀想となんぼうでも、なんぼうでもその者を拾ひあげて捨てぬ、何処々々々までの御実意なのであります。

私はこうして皆さんに仏様のお話を聞いて頂くのですが皆さんはこの私を見て、定めし何時も仏様ばかり喜んでゐるのだらうなどと思つてござるやも知れぬが、この私とも仕様のない人間であります。始終喜びずめであるわけではありません。仏様を忘れてゐると云えばおかしいが、忘れてゐる時もありがちです。ここで信心忘れてゐるのは困るではおかしな話で、その反対に朝も晩もよろこび通しては、これは氣違ひであります。

吾々日常のことは、次から次へと種々なことがおこり通してゐる。それ故、仏様は、喜べぬのが承知故、それが可哀想で捨ておけぬ、氣にするなどの仰せであります。聖人は教行信証をお書きになつてこれを吾々に残して下された。その御本の何処を拜見しても、真実の事が出来ぬ、所謂虚仮不実であると仰せられております。

外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を

罪深いと思へない、それ程の罪深い者を、それを捨てぬと仰せあるまことの念仏、お慈悲であります。これを申して見たかったのであります。

結願の日になりましたが、ここでもう一つ聴いて頂きたいと思ひますことは、聖人のお奥方の恵信尼公のお手紙であります。これは尼公が末娘の覚信尼様に宛てられたもので、大正十年に西本願寺の蔵の中から発見されたものであります。これに聖人が法然上人の吉水の御坊で御入信遊ばされたことが書かれてありまして、このお手紙は中々有難いので、すこし読んでみようと思ひます。

……やまを出でて、六角堂に百日こもらせ給いて、後世をいのらせ給いけるに、九十五日の暁月、聖徳太子の文をむすびて、示現にあずからせ給いて候いければ、やがてその暁月いでさせ給うて、後世の助からんずる縁に、あいまいらせんと、尋ねまいらせて、法然上人にあいまいらせて、又六角堂に、百日こもらせ給いて候いけるように、又百か日、降るにも照るにも、いかなる大事にもまいりてありしに、唯後世の事は、善き人にも、悪しきにも、同じように、生死出すべき道をば、唯一筋に仰せられ候いしを、うけたまわり定めて候いしかば、上人のわたらせ給わん処には、人は

全く御疲れの休まる時はないと思うたが、如来の御恩を感ずれば身を粉にしても法の為に動かねばならぬので、かく思えば気の毒にも何にもない。嗚呼実に世の中は面白きもの。この夕景人を訪ねました。するとその人語りて主人の事を彼れ此れと私は一時は随分心配いたしました。併し自分分は第一の問題の終りて後なれば、もはや第一に止まりて心配する必要なし、依って第二の問題に進まんことを考えっております。何を申しても有難い事。

◎ 五月十八日 南無阿弥陀仏々々々々々々。この日は前日より少し気分があしくあったのに、何だか気分がやすらかで大変よろこばして頂いた。午前は主人と二人で語り合いて、御慈悲を喜びて現在の自分等の境遇を喜んでいました。その上何だか御念仏も出て来て御念仏のみ称えておりました。すると御風頃近角先生が御出で下された。嗚呼誠に慈悲喜ぶ御利益は斯くもあるものかと大変喜ばして頂いたのである。一時頃先生は御滞りになったが、宝閣様の御令闕が見えて大変信仰上について御話は深くなったのである。嗚呼今日は全く有難い、吾が本当の親友が二人も御訪ね下されたかと思うと誠に有難いので感謝いたします。その上この日は玉日宮様の御命日に加えて明如上人の御命日で一層有難く思う次第であります。何れにもせよ兎に角御

親在(ましま)さず

誠に適切に感じ一層涙はこぼれ出で、何とも云うて見ようもないほど有難く思つた。実に御命日にあたりて一遍の読経をいたして、併せて仏様に感謝いたします。又思ひ出したは信後は喜ぶがあたり前なり、然るを喜ばざるは煩惱の所為なり、然しその喜ばれない中から喜ぶのが本当の喜び、その煩惱の中より慶ぶのを如来様は御喜び下さるのであるということを知りて、一層有難く思つて御念仏を唱えたのである。南無阿弥陀仏々々々々々々。

一、念仏もうしそらえども、踊躍歡喜のころおろそかにそうろうこと、またいそぎ浄土へまいりたきころのそらわぬは、いかにとそうろうべきことにてそうろうやらんともうしいれてそうらいしかば、親鸞もこの不審ありつるに唯田房おなじころにてありけり。よく／＼案じみれば、天におどり地におどるほどによるこぶべきころをおさえてよろこばせざるは煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけりとしられて、いよく／＼たのもしくおほゆるなり。また浄土へいそぎまいりたきころのなくて、いささか所労のこともあれば死なんするやらんところほそくおほゆることも煩惱の所為なり。久遠劫よりいままで流転せる苦惱の旧里は

慈悲喜ばないではいけないと深く信するのであります。南無阿弥陀仏々々々々々々。

◎ 六月二日 母上(実母)の御命日なりし為、先生の所から帰って園生皆さんに読経を御依頼しようかとも思うたが、却って一人でしんみりと仏参した方が宜しかろうと思つて、一人して御読経いたしました。母上の御うつしえを前に立つれば有りし昔の事思い浮かべて何とも云うてみようがない。現にこの身体がある以上は母上ましまして自分を殊に末子として愛して下されたのであろう、今晚は自分が斯様に御経をあぐれば母上もこの所にいらして下さるので、母上と御二人であると思ひながら又思いつづけた。自分は何だか子供が欲しいと思つて、母上もかく自分を思うて下されたのであろう、生れ落ちるより下にもおかずして九才まで蝶よ花よと御育て下されたのであろう、今御存命ならばこの大きな体も御目にかけよう、御相談もいたそう、なお御慈悲を受けようと思いつづけて、父上の御事今日このように阿弥陀経をすらく／＼読むのも、父上より教へて頂いたと心は種々に砕けて落涙、ただ落涙、先日来の兄へ対しての事なども誠にすまぬと蔭ながら懺悔をいたします。

樹静まらんとすれども風止まず、子養わんとすれども

すがたたく、未だうまれざる安養の浄土はこいしからずそうろうこと、まことによくよく煩惱の興盛にそうろうにこそ、なごりおしくおもえども娑婆の縁つきてちからなくしておわるときに彼の土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきころのなきものをことにあわれみたまうなり。これにつけてこそいよく／＼大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じそうらえ、踊躍歡喜のころもあり、いそぎ浄土へまいりたくそうらわんには、煩惱のなきやらんと、あやしくそうらいなましと云々。

◎ 六月六日 何だか二日ばかりは余りうれしいと思わないので種々仕事に取りまぎれているので、その内御念仏を称えんと全く邪念が去った。安々往生が楽しめます。この味わいは法を喜ぶ人でなくては全くわからないと思う。南無阿弥陀仏々々々々々々。午後は玉耶会に参らんとするのである。玉耶会もなか／＼盛んであります。五六人も御集まりであります。泉師には白隠禪師の無我になられた御話と、師の御歌などを御話し下されたのである。この日は何だか気にくわぬ心持がしたのである、けれども世間的には大変ふざけて面白くありました。ふざけまわりて帰りました。この日はつく／＼考うれば清沢先生の御年回と、並に御忌日というのでこの夜学園では仏前に御礼をなして、

先生の製作の御本を園員が読まれて大変有難く拝聴いたしました。自分は思うたのである、自分が斯様に法に熱心になったのもひたすら清沢先生の御導きと思う。而も先生の御住まいあそばせし御跡に住まして頂き、誠に申す所の外と、自分にはあまり勝手のような御話が、兎に角浅からぬ御恩を受けおると深く感謝いたします。南無阿弥陀仏々々々々々々。 終り。

忠子夫人の信仰

泉 道雄

四海皆兄弟

「御一代聞書」に蓮師は法敬をつかまえて「信の上はさきに生るるものは兄、後に生るるものは弟、法敬と我れとは兄弟よ」と仰せられている。信の上は一味平等である。上下貴賤、男女長幼の差別はない、皆これ兄弟なり同胞なり。夫人はたしかにこの信念に達せられていたので、信仰の友に対しては肉親の兄弟も及ばない親しみがあつた。日記の中で、予の如きものを捉えて兄上々々と呼ばれたのは誠に恐縮の至りであるが、これは夫人の飾りなき言葉である。夫人には身分の上下など眼中になかつた。それ故、信念の一致する所があれば誰でも兄上姉上と呼び、父上母上と称せられたのである。倉本と云う同行を倉本父上とし、さる漁村の老婆を母上と呼ばれているなど如何にも無

我である。
又未信の学生をとらえて仮りの兄弟であると称し、早く早く真の兄弟になって下さいと日夜に祈っていられたことは日記の諸所に散見するところである。
ああわれらには肉親の両親がある。肉親の兄弟がある。又、肉体の夫婦がある。こいねがわくば同一信海に浴して万劫かわりなき心霊上の親子たり、夫婦たり、兄弟たるを得ん事を。

◎

噫、夫人の生涯は短生涯であつた。二十三歳といえばまだうら若い年である。夫人の地位と夫人の信念をもつてして長く同和学園の経営に尽して貰つたなら、教界のため将来多大の功績があつたであろうに、誠に残念である。学園の今日、園員は慈母を失つた孤児のそれである。園友が訪れると直に立って玄関に迎えられた夫人の姿は、今は遂に見ることが出来なくなつた。ああ夫人はついに逝かれた。その屍は日暮里原頭一片の茶毘（たび）と化し終つた。しかしその熱烈な信念と温かい愛情とは永く学園の空気を彩つて事々物々の上に、一々その記念を留めていたのであるかくて夫人は常楽我浄の淨刹に生れて、我等に指導と鞭撻とを垂れて下さるのである。南無阿弥陀仏。

明治四十二年十二月十日。

私の日記録

(二)

高千穂 徹 乗

孤独の自覺

亀井勝一郎氏はいつも「病老の自覺」ということばで求道者のすがたを説明されたが、私たちは病氣になつてはじめてよく自覺されることは、人間は孤独だということである。

痛みや苦しきは親兄弟といえども代わることはできない。本気で看病している肉親でも、病人を前にして疲れると眠ることもある。病人はカンシヤクをおこしながらも自身の孤独をつくづく感じとり、ひとり自分を見つめるのである。あるいは死の壁につきあたつて、永遠の生命について思いめぐらすものである。医者信頼してすべてをまかせる態度は宗教における帰依の心に通ずるものである。両手を離して仏の願力に全託し、その慈悲を領受するところに私の生活の方向転換が行われる。

歩々これ道場であり、平常心これ道である。不離仏であり、値遇仏である。念仏と生活は一致する。

致命的な声の消失

私は三月の末に退院し、その後約二十数回のレントゲンの照射を行つただけで、声を失つたけれども、からだは元氣を恢復した。しかしガンは切り取つても早く六ヶ月、おそくて三年の間に再発すればもうどうにもならない。病院と京町の自坊を往復する車の中で、ちようど桜が満開の状態本城を通りながら、余命いくばくと思えば、嚴肅なこころにうたれた。まったく思いがけぬ大病によって死生の一関に参徹し、九死に一生を得たとはいへ、私にとって声をうばわれたことは致命傷である。五十歳を転機として第二の人生が展開したが、不具の身を以て動乱の世相の中に生き抜くことは容易なわざではない。少しのたくわえもない貧しい学究の身にとつて今後どれだけわれと家族を養うてゆくことができるのであろうか。

深く業苦を体感

前に述べたように、私は十才の春に父にわかれてから、さまざまな困難に耐えて、今日までひとすじに学問の道を歩みつづけてきた。思えば過去五十年のあいだに、いろいろ

ろな難関をきりぬけてきたが、いまここに不自由な廃人として残された。しかし私は今日までの生活をかえりみて、そのすべてを私の受くべき業苦として、私自身がになわねばならぬものと信じている。私はこのたび大病によって深く自分の業苦を体験するとともに、私自身の上にもふりそそがれている仏さまの慈心を感じせしめられた。私は悲しくも一声の念仏さえ唱えることはできない身となったが、黙して静かに仏を仰ぐとき、いよいよ身近に仏のよびごえを聞くことができるのである。ガンの再発は早ければ三月か半年以内に出るだろうとのことだったので、私は身辺の整理をすませて静かに最後の日の近づくのを待った。

こう言えば簡単のようだが人間は一度は必ず死ぬものだということを承知していても、その死が近いところにあることを自覚しながら、一日一日の生活を満ち足りた心で楽しく生きぬくことは容易なわざではない。

過去を捨てて

五十才で私の第一の人生は終わった。私はすべての過去を忘れ、すべての過去を捨てて第二の人生に出発した。(一)掃除(二)勸行の清規を守って黙々として落葉を掃き雑草を抜き、黙々として仏前に経を唱えた。晴れた日は菜園の地を耕し、イヌやニワトリやウサギを友としてたわむれ、雨の日は先徳の書き残された書物をひらいて読みふけた。

愚禿のこころ

秋芳洞(山口県)のウナギは目が無いけれども、メクラであることを知らず、闇にあつて闇であることも知らず、ただウロウロと水に棲み、ヨロヨロと泳いで、やがて死んで、永劫の闇路に消えて行きますが、私共も、煩惱具足の身、火宅無常の世に、明日は消える露のいのちであるのにそれも知らず、ただ、惜しい、欲しいで、昨日を送り、今も空しく過ごしております。それでいて、おれがおれがとありもせぬ智慧をふり廻して、空しく日を送っておりますが、その無智、無明の有様は、全く秋芳洞のメクラのウナギと同様であります。

その、愚かな私を、否愚かであつてかしこぶることしかなできないメクラの私を、遠い昔からお見抜き下さつて「あわれ」と思召されて「かならず救いとけて、仏にさせずにおかないぞ」と、お誓い下さり、御苦勞下さるのが、如来さまの本願であります。

その本願の大悲のお力を身にうけて、成程、無智、無明のメクラの私のための御本願でありましたかと気づかせて

かえりみれば過去五十年の私の生活はすべて御恩のたまものである。私は天地のめぐみによって生かされ、同信の人たちの温情に浴して今日に至つた。このめぐみに浴し、このめぐみによって生かされた私は、さらに大きな仏の慈心にやしなわれ、慈愛の手にまもられて生かされてゆくのである。

悔いのない余生を

私の余命いくばくもないことを思うにつけても、一日一日を最後と考えて悔いのないように余生を過ごさねばならぬ。故郷を離れて三十年、私は今ここに廃疾の身となって帰ってきたが、今こそ荒れはた郷里の心田を耕し、戦争のために身心をうちくたかれた人たちと法味をわかち、法悦をともしなければならぬ。よろずのことたわごと、そらごと、まことあることなきなかに、仏の慈悲のみがまことと光であり力である。私はこのこと一つをあらわすために、残された生命を燃やしつくして浄土への道を歩みつつけねばならぬ。

私はこのように決意して、いのちのかぎり法輪を転じて親鸞聖人の教えを顕彰しようとしたがあがった。

— 昭和四三、七、十二日付西日本新聞掲載 —

松村繁雄

いただけるのであります。

本願力にあいぬれば、空しく過ぐる人ぞなき

功德の宝海みちみちて、煩惱の濁水へだてなし
本願真実のお力の不思議さには、狂人に病識がないように、自分が自分を正しく知る力もない身に、無智のメクラしかもそれさえも気づき得ない身を照し出して下さり、そうした浅ましい凡夫を、如来さまの真実の智慧と慈悲の限りのない光明の中に包み護つて下さるのであります。

煩惱具足と信知して 本願力に乗ずれば
即ち穢身すてはてて 法性常樂証せしむ

煩惱具足の凡夫であると自覚出来るのは、菩薩の高きさととりを得て、凡夫地を脱して始めて凡夫であったと知れるのであります。私共凡夫は、仏語を信じて知らしめられるばかりであります。そこに煩惱具足の穢身のそのまま如来さまの、久遠の浄土にまいる、大いなるさとりを得させて下さるのであります。

正信偈に

「如来世に出でたまうゆえんは、唯弥陀の本願を説くためであつた。五濁悪時の群生は、まさに如来の如実の言を信ずべし」

とありますように、釈迦諸仏の出世の本懐は私共に弥陀仏の本願を説いてとどけて下さるうためでありますから、私共がこの世に生れさせてもらうた所詮は、この本願をきき、如来さまにあわせていただくためでありました。

私共仏教徒が異口同音に御仏前に誦し続けてきました帰三寶偈にも

「人身受け難し、今すでに受く、仏法聞き難し、今すでに聞く。この身今生に向つて度せずんば更にいずれの生に向つてかこの身を度せん。大衆もろともに至心に三寶に帰依したてまつるべし」と、あります。古歌に

急げ人 弥陀のみ船のかよううち 乗りおくれなば誰かわたさん

と、切々としてお勧め下さるのも、私共の求める心もおし得ないことを悲憐されての上であります。

島根の妙好人の浅原才市さんの歌に

わたしやあなたにおがまれて たすかってくれとおがまれて、ごおんうれしや、南無阿弥陀仏

と、如来さまをおがむ前に、おがまれて、おがまれて、

念 仏 詩 抄

うしろに

あなたの

うしろに

ナムアミダブツさまが

わたしの

うしろに

ナムアミダブツさまが

みんなの

うしろに

ナムアミダブツさまが

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

如来 大悲

親鸞聖人ご和讃に

ここに如来さまに遇わせていただけるのであります。常不輕菩薩は有縁の衆生をおがまれて「あなたも仏になれる人です」とくりかえして申しております。私共凡夫には、人を見れば泥棒と思えというように、無智の闇にあって疑心暗鬼を続け、愛憎違順しておりますが、如来様や、菩薩さまは、こうした私共をおがみにおがんで下さるのであります。こうした御めぐみにそだてられて、才市さんは

娑婆は、あなたの世界

才市の後生のさだまる世界

ここは、あなたの

待ち伏せの茶屋

とうたいました。如来さまに十劫の間待ち伏せしてもろうて、如来さまの真実の世界へ生れさせて頂くのであります。この上は、一日一日、一足一足は、如来さまに抱かれてのお浄土へ帰らせて頂く旅路であります。

「腰かけた石を拜んで遍路立つ」、七十八年、腰かけさせて頂いたこの娑婆を拜みながら旅立たせてもらいたいものであります。

五〇、三、一八日



木 村 無 相

信心のひとにおとらじと

疑心自力の行者も

如来大悲の恩をしり

称名念仏はげむべし

疑心自力のわれらにも

あらわれたもう御尊号

如来大悲の御尊号

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

どこどこまでも

どこどこまでも

お見捨てないお慈悲

ああ

それは 無量寿
無量寿如来
帰命無量寿如来

聖人さまは
それをご感得になられた

〃弥陀の名号

となえつつ〃

となえつつ〃

乗せて必ず

船

船

船

〃弥陀弘誓の船のみぞ
乗せて必ず渡しける〃

ナムアミダブツは

弘誓の船

〃ナムアミダブツと

たのませたまいて〃

乗せて必ず渡しける

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

如意宝珠

名号即ち 如意宝珠

名号即ち 如意宝珠

教行信証「行巻」に

〃大行とは

無碍光如来のみ名を

称するなり

斯の行は即ち

諸の善法を撰し

諸の徳本を具せり

真如一実の功德宝海なり

かるがゆえに大行と名づく〃

名号即ち如意宝珠

名号即ち如意宝珠

このからだ

ああ

七十のこのカラダ

撰取して

弥陀の名号

となえつつ

そのみこころを

み名に聞く

聞こえたまいて

ナムアミダ

現われたまいて

ナムアミダ

〃撰取して捨てざれば

アミダと名づけたてまつる〃

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

遺 偈

源通寺禿頭誠老師

七十年、何の成す所ぞ

すべて空事、戯事のみ

唯一句、真実在有り

南無阿弥陀仏

大法のいれもの
大法のいれもの
大法のいれもの――

他力の悲願

歎異抄に

〃仏かねてしろしめして

煩惱具足の凡夫と

仰せられたることなれば

他力の悲願はかくの如きの

われらがためなりけり〃

〃煩惱具足〃は如来の仰せ

わたしの目覚めのそれではない

〃こんな愚かなこのわたし

自覚出来ようはずが無い

〃他力の悲願はかくの如きの

われらがためなりけり〃

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

夏(げ)の御文

花田正夫

蓮如上人八十四歳の五月下旬にこの御文を作られました。この年の三月頃からお病氣勝ちでお粥だけのお生活、翌年春には御入滅になりました。この御文には、昨日は過ぎ行き、明日は来たらず、今日一日、今日一日の一期一会のお心からの切々としたお勧めであります。

そもそも今日の聖教を聴聞のためにとてみなみなこれへおより候ことは、信心のいわれをよくよく心得られ候て、今日よりは御心をうかうかと御もち候わで、ききわけられ候わではなにの所用(しよよう)もなきことにてあるべく候、御耳をすましてよくよくこしめし候べし

(第一節)

上人の御信徳を慕って、御坊にお参りする同行方のために、上人が七高祖方の御聖教の中から有難いところを選ばれ、御堂衆に読ませて、皆にお聞かせになると、参詣の人々も非常に喜び、上人もよいことを見つけたと御満足でありました。ところが御恩になれて、手ですることを足です

とおもうばかりに

おろかなる身こそなかなか嬉しけれ、弥陀のちかいに
あうとおもえば

ほととぎす、聞くや ころをからにして

等々とも、正信偈に「邪見橋慢の悪衆生は、信樂を受持すること甚だもって難し」といわれるところであります。

更に、信心のいわれをお聞かせ下さる方は、そのまま如来の御使であります。昔から、仏法僧の三宝は一体であるとありますし、經典口なし、仏像もの言わずで、私のよいうな智目、行者を欠く身には、よき人を通して仏心を聞かせて頂く以外には救いの光がさしません。聖人の和讃に

如来の興世にあいがたく 諸仏の経道ききがたし

菩薩の勝法きくことも 無量劫にもまれらなり。

善知識にあうことも おしうることもまたかたし

よくきくこともかたければ信することもなおかたし。

とあり、幸にも恩師法然上人にあわれたことを

曠劫多生のあいだにも 出離の強縁しらざりき

本師源空いままさずば このたびむなくすぎなまし。

諸仏方便ときいたり 源空ひじりとしめしつ

無上の信心をしえてぞ 涅槃のかどをばひらきける。

と、満腔の感謝をしていられますが、私共は祖師や中興

蓮如上人のお導きによって救いの綱を頂くのであります。

るたとえ通り、段々形式化してうわすべりするのを誠められて、うかうかとせず、信心のいわれをよく聞きひらくようにとねんごろに注意せられ、しかも、今日のとか、今日よりとか、只今と繰返されて、二度とない今日コンシチ只今を大切に、明日にのばさぬようにとの思召しであります。

しかも、聴聞の心得として「御耳をすましてよくよくこしめし候べし」と、同行衆に敬語をもって丁寧に呼びかけられて居られますのは、親鸞聖人が同行衆を、如来の御弟子とあがめ、御同行、御同朋とつかえられたのと同じお心境であります。そして教を聞くにはおのれを空しくして渴仰のこうべをうなだれ、解脱の耳をそばだてて聞くようにと、きびしく誡められています。昔から虚に出でて実に戻ると諺にあります通り、うつわを空っぽにしてこそどんなものをも入れることが出来ますが、籠に一杯物を容れていては入りませぬ。われよし、われかしこしというしこりが心中にあると、教が心に徹到しません。古歌にも

このみのり聞きうることのかたきかな、われかしこし

それ、安心と申すは、もろもろの難行をすてて、一心

に弥陀如来をたのみ、今度のわれらが後生たすけたまえと申すをこそ、安心を決定したる行者とは申し候なれ。

(第二節)

ここに、真宗のかなめを短刀直人に「難行をすてて一心に弥陀如来、今度のわれらが後生たすけたまえとたの時、罪はどんなに深くとも一人のこらすかならずおすくい下さると、今から安心させて頂くばかりである」と仰言るのであります。

これと申しますのも、現在もその傾向がありますが中興上人の当時、諸善万行を修して立派な身となつてたすかろうとしたり、或は念仏をはげんでその力で往生を願ひ臨終に正念に住して来迎を期すというように、悪人をおもらしにならない本願とおききしていても、そうは云うものすこしはよくならねばという、相對五分五分の心で広大無辺な仏心をそんたくしている、自力疑心の人々の多いにつけ、一心帰命の信心をもって、真宗の真面目を水際立ってお勧め下さったので、祖師聖人の信心為本の宗風がここにいたるところに復興されたのであります。

さてこの中心は「一心に弥陀をたのめ」にあります。が、中興上人はここを「阿弥陀如来の仰せられけるようは、末代の凡夫、罪業の我等たらんものは、罪はいかほど

深くとも、一心に我をたのまんものはかならず救うべし」と、弥陀仏の御心をそのままにおつたえ下さるのであります。その「我をたのめ」の仰せを、罪業の身に頂いて、弥陀たのむ身にさせて頂くのであります。

先日、京都の向日町の療育院の副校長の話を感銘深く聞きました。それは、「心身の障害児を療育するには、その児になりきって行く外はない。たとえば障害児がころんだ時、すぐ可哀相にと手を借す人が多いが、そうしては子供が何時までも独りで立ち上るようにはならない、そこで子供が転ぶと、教師も転んで、子供に立ち上る有様を見さし続けていると、子供もそれにならってやがて立ち上るようになる云々」とあった。

さて歎異抄の随所に、私の立ち上れぬにつけ、親鸞聖人も「いずれの行も及び難き地獄一定の身と表白され、この煩惱具足のわれらは、いずれの行にても生死をはなることあるべからざるを憐みたまいて願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみ奉つて悪人が悪人でしたと信じさせて頂くばかりである」とも「しかるに仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけり」とも「さればそくばくの業を持ちける身にありけるをたすけんと思召し立ちける本願のかたじけなさよ」とも常に仰せ

ても、死んだらローソクの灯が消えたと同じで、それでしまいであるというように、無の見到落ち易いからであります。もとより死後幽霊が出るのか、見てきたように語る人もありますが、壁一重向うが見えぬ眼をもって死後が有るの無いのときめているのが、独断であり邪見であります。「我は何事も知らざることを知り」とソクラテスは無智の自覚を出発点とし、孔子は「生の従来するところを知らず、いづくんぞ死を知らんや」と云っております。わからぬとわかる、ことに祖聖はこの点を「内は愚にして外は賢なり」と、内が愚であるから人にかしこぶることしか出来ぬ、狂人が狂と思えぬと同じであると慚愧していられます。草も木も大地に立つように、聖人の信心はここに立って、本願を仰がれているのであります。

さて私共は生きること専念して、後生よりも今生のことばかりに心身をすりへらしています。しかし早ければ早いほどよろしいが、ことに中年以後はこの死の暗黒に一つの救いの光りを頂いていないと、段々と孤独と空虚と寂寥がこぼむことの出来ぬ力で身心をおそうてまいりませう。生死の大海に救いの船を見出した人ばかりが最後まで生き生きと活動させて頂けるのであります。死は向うにあるのでなく生の中に死があるので、生を真剣に考える人は死が大きな問題となります。ハイデッガーは、唯

られています。そこに凡愚の私に同(どう)じて、本願一つをたのまれているお姿を拝し、やがて私もその聖人の同じて下さる大悲に催されて「私一人の本願でましました」と弥陀仏を一心にたのむ心もおこされ、同時にどうあろうとお見捨てのない大悲の心光におさめられて、即座に往生一定の身と仏力によって安心させて頂くのであります。祖聖ばかりでなく、仰げは七祖聖人も、蓮如上人も私に同じこのお導きであります。御和讃には「釈迦弥陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、われらが無上の信心を發起せしめたまうなり」と讃していられます。

歎異抄では「日ごろ本願他力真宗を知らざる人、弥陀の智慧をたまわりて、日ごろのころこころにては往生かなうべからずと思ひて、本このころをひきかえて本願をたのみまいらすをこそ廻心とは申し候え」と、念仏者の生涯一度の廻心を示されています。古歌にも

たのませてたのまれたまう弥陀なれば たのむころもわれとおこらず

と云われるところであります。

次に「今度のわれらが後生たすけたまえ」とありますが、ことに若い人々には後生などという言葉が通じにくくなっています。それも無理からぬことで、私共は唯生きることばかりを考えて、死は遠くにやっているし、死に對し

物論者は有を既定の事実として認めたと上に成立しているが、有は無の上に浮かぶ島で、有の根底の無を問題としています。私共も生の根底にある死が一大事でありませう。

さて、死を前にして一体何が残るのでありませうか。「まことに死せんときは、かねてたのみおきつる妻子も財宝も身にそうものとは一つもなし。死出の山路、三途の大河をばただひとりにてこそ行きなんすれ」とは文字通りそのとおりであります。或実業家が裸一貫で大阪に出て、巨万の富を得て、還暦を迎えました。そこで子供達に夫々財産を頒け与えましたが、子供達は感謝しどころか当然と思ひ、その上に子供同志が互に猜疑心を持ち始めました。その人は自分は全財産を頒けて無一物となつたけれど、その財を造るのに重ねた罪業は分け与えることは出来ず、後にまとうて身から離れぬ有様に気づいてはじめて聞法の人となりました。又或老婦人は、主人と別れたあと二人の子供を女手一つで育てあげ、夫々に学校も卒業さし、家を待たせたが、さて自分の住家が無いことに驚いて求道聞法して、如来の家こそわが住家であると気づきました。

順境、逆境を問わず、後生の問題は一大事であります。そこに私になりきって、常に手を引いて下さる仏の大悲を頂いて、無明の闇も破られ、一切の願いも満足することが出来るのであります。

このいわれを知りてのうえの、仏恩報謝の念仏とは申すことにて候なり。されば聖人の和讃にも

智慧の念仏うることは、法蔵願力のなせるなり

信心の智慧に入りてこそ、仏恩報ずる身とはなれ

と仰せられたり。このころをもちて心得られ候わんこと肝要にて候。
(第三節)

源信僧都の横川法語に、本願にあえた喜びと人間に生れたよろこびをのべられています。私共の一般の喜びは煩惱の満足、財産、名譽、愛情等々の外物に支配されて、有ればあって憂い、無ければ無くて憂いがつきまとうてはてがありません、煩惱無尽の身の当然の果として生死海は無辺であります。この無明長夜に大灯炬として智慧の念仏を頂く時、旭日に夜の闇が破られるように、人生の久遠の黎明をむかえ、仏恩、師恩、衆生恩も自然に知らされはじめるのであります。世間のよろこびはそれに暗い影がそうてあれも一時、これも一時と点滅しますが、本願にありよろこびは年々に深まり、空しくなることはありません。

それについては、まず念仏の行者、南無阿弥陀仏の名号をかば、ああはやわが往生は成就しにけり。十方衆生往生成就せずば正覚とらじと、ちかいたまいし法蔵菩薩往生成就せぬならば仏とならないとお誓いを成就して阿弥陀仏となられ、浄土も完成されているのであります。私共の往生は阿弥陀仏が成就して下さっていることとありがたさを知らされました。

さて浄土真実の安心は、本願成就を聞く一つであります。それですから浄土に往生するとすぐ成仏させて頂くので浄土に生れてのちに段々と修行を積んで成仏するのではありません。又信心の決定するのも、我共のために本願の成就されたことを聞く一念に定まるのであります。聞即信といひ、往生即成仏とあるのも、本願の成就されているお蔭であります。

涅槃経に「阿闍世のために涅槃に入らず」とあります。が、釈尊は五逆の人阿闍世が救われるまでは死ぬに死ぬなことの慈語であります。祖聖はいつも「親鸞一人がためなりけり」とお味わいになっていきます、愚禿の身のための本願にましますとお喜びであります。

蓮如上人はここに、南無阿弥陀仏の名号を聞くにつけ、安養の浄土と聞くにつけ、御身の往生決定をよろこばれたのであります。それなのに、名号も浄土も我身のためと信知せず、あれこれとはからうて、ひとごと聞いていることを悲しまれているのであります。釈迦弥陀は慈悲の父母とありまして、自分の父母と頂けず、へだてていること

薩の正覚の果名なるがゆえにと思ふべしといえり。また極楽という名を聞かば、ああわが往生すべきところを成就したまいにけり。衆生往生せずば正覚とらじとちかいたまいし法蔵比丘の成就したまえる極楽よとおもうべし。また本願を信じ名号をとらじとも、余所なる仏の功德とおもいて名号に功をいれなばなどか往生をとげざらんなど思わんは悲しかるべきことなり。ひしと我等が往生成就せしがたを南無阿弥陀仏とはいひけるといふ信心おこりぬれば、仏体すなわちわれらが往生の行なるが故に、一声のところ往生を決定するなり。このころは安心をとりてのうえのことどもにてはんべるなりとこころえらるべきことなりと思ふべきものなり。あなかしこ、あなかしこ。
(第四節)

十年前、私は蓮如上人が安心決定鈔を何時もくりかえしてお読みになつて、いつも黄金を掘り出す思いがするところであったことうながされて、安心決定鈔を私もポツポツ拝読しました時、読後の所感として、

往生は成就しけりと喜びにあふるる弥陀の正覚の聲と思わず讃仰しました。病危篤の時、医学生では間にあいません、立派に学を卒えて、何時でも患者の手当が出来る医師でなくてはかありません。今や法蔵菩薩は、衆生が

は、実母を継母と思ひこんで自らも苦しみ、親をも悲しませているのであります。

幸によき人に導かれ、へだて続ける私共を飽くまでもへだて給わぬ大悲心聞かせて頂く時、ああ有り難い南無阿弥陀仏と称えずには居られませんが、念仏申しましようと思ひ立つ一念に、八万四千の光明の中におさめとられて、二度とお見捨てない大悲心のおとほひに往生を決定させて頂くのであります。ここに一声の念仏もまたすにおたすけ頂くことは、いのち短命の者、又口がしびれて称えられぬ者をおもらし下さらぬ周到な思召してあります。九州の酒井幽演師が腎臓病の末期に、

病み疲れ御名一声も称ええず 大悲のみむねいよいよたつとし

と辞世の歌をのこされたことも思ひ併せられます。



あとがき

三十年前、原爆、敗戦といたましい記憶がよみがえる八月がまいりました。生きのびた今日の無事を省みさせられる月であります。

まず近角常音先生の御忌月を迎え、御晩年の御法話を頂きました。常観先生が表に立たれ、常音先生は内をまもられて、求道会館と求道学舎を中心として法灯を掲げて下さり、東都に集る青年学徒をはじめ、全国の有縁の同胞に仏縁を結んで下さいました。私の病中お見舞い下さった時

またやりそこない、またやりそこない、それだからお呆れないお慈悲でないか
の一句を短冊に書きのこして下さいました
が、やりそこないのやまぬ私には、大きな支えとなって事毎に念仏にかえらされております。

高千穂師の声を失われて、病を直視されての浄土への旅の記は、身につまされて教えられることの多いものであります。心臓病でヒビの入った身体も大切にと診断されて以来蓬戸不出の生活に転じました私にはまざまざと当時を思い出されます。

松村繁雄さんは山口市で桃林師の導きを受けられた方で月々有縁の方々とは法縁をあ

たためて居られ、法信を続けて居られます。今回はその一つを抄出させて頂きました。

菅瀬忠子夫人の信仰記の泉道雄師は、東京都の千代田学園の校長として女子の仏教学園に終生尽力下さった方です。

木村無相さんとは事毎に交信し、同年、同信のよき伴侶となって貰っております。求めて得た友でなく、自然に仏縁によって与えられた友であります。

最近某師から、かつての京都の学生親鸞会に御縁のあった方々が、現在の日本で各方面に青色青光、白色白光と夫々の活動されているのに、会員組織も中心の会館もないのが淋しいと云って来られました。私には目に見えぬ仏縁に結ばれた友の存在が何より力強く有難いのであります。池山先生は一つの会、近角先生は求道会という会の名は便宜上持たれましたがとりわけ会員組織というようなものはなく、出入り自由なものであったと思えます。友達にしましてもつくった友よりも自然に出来た友が永続します。まして仏縁に恵まれて与えられた同信の友は浄土まで手を結んで行けるたのもしがあります。フト自分を省みます時そうした目に見えぬ御縁を形の出来たもの以上に常に心に持ち続けて来たを改めて知らされました。

△御案内▽

○ 一 道会例会。毎月、第一、三、三日曜
午後一時半。

南区駈上町二ノ八八。一道会館
市バス、新郊通り二丁目下車。

地下鉄、新瑞橋終点下車。

○ 教西寺法話会。毎月二十四日、

午前午後、昭和区小桜町三丁目四番地
市バス、北山町、又は御器所通り下車

定価 半年 五〇〇円 (送共)
一年 一〇〇〇円 (送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人 花田正夫

電話八二一七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人 坂部光雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番
郵便番号 四五七